



# 夢追人VI

かとう学園 宗像市立河東中学校  
学校通信第49号(R5. 3. 3)

9年生のみなさんは、一週間後には卒業です。この学校だよりを届けるのも今回が最後です。3年間、つたない文章を読んでくれて本当にありがとうございました。前任校でも前々任校でも月に一回の発行だった学校だよりを、河東中に赴任してからは4~5倍のペースで書きました。3年前に始まったコロナ禍で、学校の情報が閉ざされるのを何とかしようと思ったからです。学校でやっていることや校長の考えを生徒や保護者のみなさん、地域の方々に発信しなければとの思いからでした。時々、「学校だよりを読んでいますよ」と声をかけてもらってとてもうれしく思いました。9年生の生徒のみなさんと保護者のみなさんに読んでもらう最後の通信になります。これまでご愛読いただき心より感謝申し上げます。

## 授業研修の風景

河東中の授業もこの3年で大きく様変わりをしてきました。タブレットの利用やICT機器の活用はもちろん、対話を重視した交流活動にも力を入れてきました。

## 中村先生(道徳)

パーソナルスペース(人には、目には見えない自分の感覚として他者に侵入されると不快に感じる空間が存在)を理解することで他者との距離感を考える授業でした。



中村先生がキーステーションとして、オンラインで配信される7学年一斉の道徳の授業が行われました。家族・友人・知らない人などに分けて図上で距離感を考えるワークショップもありました。年齢や性別・国の文化や性格による違いなどについても考え合わせ、小グループで意見交換が行われました。

## 山下先生(道徳)

山下先生が9年生に送る道徳を使ったメッセージ。三浦雄一郎さんのエベレスト登山を題材にしなが、高い目標をやり遂げるには何が大切かを学びました。



A small change can make a big difference. 時折英語を交えながらの9年4組の道徳の授業。山下先生は花の茎を水の中で切る「水切り」を実演。1日2回水かえをすることで花は命を長引かせることができるということも話されました。そうした小さな積み重ねが目標を達成するためには大切だと学びました。



## 井上先生(理科)

地震の揺れには、初期微動(P波)と主要動(S波)があり、伝わる時間が震源からの距離によって異なることをデータをもとに学習しました。

7年2組で行われた理科の授業。井上先生は季節の植物や解剖用の魚など、実物・モノをよく提示してくれます。今回は“地震計アプリ”の登場に教室がわきました。アイパッドにインストールされたアプリの地震計を使って、生徒が机を揺らすことでアプリにグラフィックに描かれる様子がプロジェクターで投影されました。



# 「運」ってあるんだろうか？ 「運」は変えられるのか？

～ 喜多川泰著『運転者』に描かれている発想 ～

あなたは、「運」というものが存在すると思いますか？—「運が良かった」「運が悪かった」と人は時々口にします。古今東西、運について研究され操作するように知恵をめぐらせてきました。日本では古くは平安時代の陰陽師、中国の易経、西洋のタロット占い…というように人間は何とか幸運を手に入れようと試行錯誤を繰り返してきました。そもそも運ってあるのでしょうか？人間の運命は生まれた時から決まっているのでしょうか？進学先、就職先、結婚相手など初めから決まっているのでしょうか？—この運ということについて描かれたおもしろい本を見つけましたので紹介します。

『運転者』という小説です。作者は喜多川泰さんという方です。

主人公の岡田修一は、生命保険の営業マン。家族のために毎日足を棒にしながら営業の仕事に駆け回っています。しかし、一日で解約が20件おこったり、娘の中学校に呼び出され先生と口論になったり、実家の店がつぶれそうだったり泣きだしたくなる日が続きます。「なんで俺ばかりこんな目にあうんだよ」と独り言をつぶやきます。

そんな時、一台のタクシーが修一をひろいます。そのタクシーは、過去からやってきて未来を変える車です。運転手は、何回か修一をタクシーに乗せるたびに、運についての考え方を教えていきます。つまり、運転手ではなく、運を転じてやる「運転者」なわけです。タクシーの中で交わされる運についてのやり取りをいくつかピックアップしましょう。まず、運にはいいもわるいもないと運転手は語ります。

「…本当は<運>にいいも悪いもないんですよ。」

「なんだって？」

「だから、運がいい人なんていないし、運が悪い人なんていない。運はそういうものじゃないんですよ。」

この運転手によれば、運はいい悪いではなく、運は使うか貯めるかだと言います。会話の続きを聞いてみましょう。

「運は、<いい>か<悪い>で表現するものじゃないんですよ。<使う><貯める>で表現するものなんです。だから先に<貯める>があって、ある程度貯まったら<使う>ができる。運は後払いです。何もしてないのにいいことが起こったりしないんです。少し貯めてはすぐ使う人もいれば、大きく貯めてから大きく使う人もいる。そのあたりは人によって違いますけどね。どちらにしても周囲から<運がいい>と思われる人は、貯まったから使っただけです。」

「運はポイントカードといっしょだっていうのか？」

修一は、最初はタクシーの運転手の言葉が信じられませんでした。自分に起こっていることを振り返りながら考え方を換え行動を起こすと、次第に運が好転し今までわからなかったことに気づいていきます。

では、この運転手(者)の言葉で胸に響いたものを2つ紹介します。

「自分の人生にとって何がプラスで何がマイナスかなんて、それが起こっているときには誰にもわかりませんよ。どんなことが起こっても、起こったことを、自分の人生において必要だった大切な経験にしていって、それが<生きる>ってことです。長い目で見たら、報われない努力なんてありません。あまりにも短い期間の努力で結果が出ることを期待しすぎているだけです。」

「そこにあなたが生まれ、ほんの百年ばかり生きて死んでいく、そのときです。あなたがその物語に登場したときよりも、少しでも多くの恩恵を残してこの物語を去る。つまり、あなたが生きたことで、少しプラスになる。それこそが真のプラス思考じゃないかと思うんです。」

最後にもう一つ、車中で交わされる二人の会話で素敵なやりとりを紹介します。

「ちりも積もれば山となるじゃなくてさ、最初から山みたいに運を貯める方法ってないのかよ。」

「ありますよ。」

「どうすればいい。教えてくれ。」

「誰かの幸せのために自分の時間を使うんです。そのときしてあげたことと、してもらったことの差が<運>です。」

この小説に描かれているのは、運はいい悪いといった固定されたものではなく、変化するもので変化させるべきものということです。善因善果。善い行いをすれば、良いことが起こる。それはポイントカードのように貯めることができる。人のためにしたことは、やがて返ってくるという発想です。努力も勉強もあらゆる練習もムダなものはなく、貯められているという考え方です。興味がある人はぜひこの本を読んでみてください。

